

情報構造と談話における受動文の機能*

加藤・雅啓**
(平成8年10月31日受理)

要 旨

中学校の英語の授業では次のような構文の書き換え練習が行われている。

(a) John gave the book to Bill. …> John gave Bill the book.

(b) John gave Bill the book. …> John gave the book to Bill.

これは、いわゆる英語の「五文型」のうちの第三文型と第四文型の書き換え練習である。しかし、このような機械的な書き換え練習はどのような意義があるのか、あるいは「ジョンはビルにその本をあげた」という同じ命題内容を表すのに、なぜ二通りの言い方があるのか等々の疑問が生じてくる。この二つの文型は、上例のように単独で用いられる場合には違いが分かりにくい。話し手と聞き手が登場する談話 (discourse) の場面を考慮すると、その違いははっきりと現れてくる。すなわち、John gave the book to Bill. の文では、話し手が最も伝えたいのは to Bill の部分で、これをより重要な情報、すなわち新情報として聞き手に伝えているのに対し、John gave Bill the book. の文では、the book を新情報として伝えている、という違いがある。本稿では、話し手と聞き手の立場から英語の談話を分析し、情報構造に関わる受動文の機能を明らかにする。

KEY WORDS

discourse	談話	double object construction	二重目的語構文
information structure	情報構造	new information	新情報
old information	旧情報	passive	受動文

1. 情報構造

話し手は自分の伝えたい内容をもとに、適切な単語を選択し、それを一定の規則に従って並べ、文を作る。しかし、話し手は自分の知っていること、伝えたいことを見境もなく、ただ文法的に並べたてるのではなく、実際にはそれを内容的に二つの部分、すなわち、聞き手も知っていると思われることと、聞き手のほうは知らないと思われることの二つに区別して述べているのである。また、聞き手は話し手がどの部分を自分にとって新しい情報として伝えようとしているか、ということに敏感に反応しながら発話の内容を理解しようとしているのである。

このように、文は聞き手にとって「新しい情報」(新情報)を表す部分と「すでに知っている情報」(旧情報)を表す部分という二つの構造から成り立っていると考えることができる。この

** 言語系教育講座

ような構造を文の「情報構造」(information structure)という。日頃、私たちは無意識のうちにこの二つの情報を区別して使っている。

- (1) a. むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは、山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。
- b. *むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんはいました。おじいさんが山へ芝刈りに、おばあさんが川へ洗濯に行きました。(*印は、その文が当該の談話において不適格文であることを示す。)

(1a)と比較するまでもなく、(1b)は不自然な文である。これを情報構造の観点から考えてみよう。(1a)の最初の文は「昔ばなし」の冒頭の部分である。ここで「おじいさん」と「おばあさん」は物語の中に初めて登場してきたのであるから、聞き手にとっては新しい情報、すなわち新情報である。(1a)の二番目の文では、この「おじいさん」と「おばあさん」は、すぐ前の文で紹介済みであることから、聞き手にとってはすでに知っている情報、すなわち旧情報である。話し手は、この違いを表すのに、新情報には「が」を用い、旧情報には「は」を用いて、聞き手に分かるように伝えているのである。(1b)の文が不自然なのは、新情報を「は」で表し、旧情報を「が」で表しているかである。このように、日本語では、新情報は「が」で表し、旧情報を「は」で表して区別していることが分かる。

このような情報構造は日本語ばかりでなく、英語にも同様に存在することが知られている。しかし、英語には日本語の「は」や「が」に相当する助詞がないので、どの部分が新情報を伝え、どの部分が旧情報を担っているのか、語彙的にはその区別がわかりにくい。この点が、英語を学習する上での一つの盲点なのである。そこで、本稿では、新情報・旧情報という情報構造の違いが英語ではどのような形で発話の中に現れているのか考えていくことにしたい。

たとえば、「ジョンはビルにその本を与えた」という内容を英語で伝えたい場合、英語では次の二通りの言い方ができる。

- (2) a. John gave the book to Bill.
b. John gave Bill the book.

学校文法の文型ということでは、(2a)はSVOA (S=John, V=gave, O=the book, A=to Bill) (Aは副詞相当語句を表す)、(2b)はSVOO (S=John, V=gave, O=Bill, O=the book) という文構造を持つ、ということが出来る。いまここで注目したいのは、同じ内容を表すのに、なぜ(2a)と(2b)という異なる二通りの構文があるのか、ということである。この問題はこれらの二文を眺めているだけではその答えは得られない。これを解くカギは、これらの文が話される文脈(コンテキスト)の中に見いだすことができる。

- (3) A: Who did John give the book to?
B: John gave the book to Bill.
- (4) A: What did John give Bill?
B: John gave Bill the book.

(3)の文脈では、Aはジョンがその本を誰かにあげたことは知っているが、誰にあげたか、ということは知らない。(3B)は、先行文脈から分かる John gave the book の部分を旧情報とし、先行文脈からは分からない to Bill を新情報として聞き手に伝えている文なのである。この意を汲んで訳すと「ジョンはその本を誰にあげたかという、それはビルなのです。」となる。

一方、(4)の文脈ではAはジョンがビルに何かをあげたことは知っているが、「何をあげたの

か不明である。これに対して、Bは「ジョンがビルに何をあげたかという、それはその本なのです。」と答える。この場合、Bの発話(4B)は、先行文脈から分かる John gave Bill を旧情報とし、先行文脈からは分からない the book を新情報として聞き手に伝えている文である、ということができる。したがって、(3B)と(4B)の情報構造は次のように表示できる：

(3B) John gave the book to Bill.

旧情報 新情報

(4B) John gave Bill the book.

旧情報 新情報

同じ内容を表すのに、(2a)と(2b)という異なる二通りの構文が存在する理由は、(3)と(4)の文脈を考慮することによって明らかになる。すなわち、英語の場合、情報構造の違いを表す日本語の「は」と「が」に相当するような助詞はない。そのかわり、適切な構文を選択し、語順を整えることによって、文脈に即した適切な情報構造を示すことができるようになってきているのである。すなわち英語は、原則的には語順によって情報構造を表す言語であるといつてよい。(3B)のような第三文型では、間接目的語を新情報としているが、(4B)のような第四文型では、文脈に応じて直接目的語を新情報として提示しているのである。¹

これまで見てきたことから、和文、英文を問わず、文には主語、述語、目的語などのような文法関係を表す文構造とは別に、聞き手がすでに知っている情報(旧情報)か、それとも未知の新しい情報(新情報)か、ということを表す情報構造と呼ばれる構造が備わっている、と考えることができる。日本語の場合は、これを助詞で表示し、英語では語順によって情報構造を表すのである。

2. 情報構造の原則 [旧情報から新情報へ]

話し手が聞き手に対してものを言う場合、その発話は、通例、新情報を担う要素と旧情報を担う要素から構成される、ということ述べてきた。このことは、話し手は聞き手がすべて承知していること(旧情報)のみを言うのでもなければ、全く知らないこと(新情報)ばかりを言うのでもない、ということになる。話し手は自分の伝えたい内容を、いわば、新情報と旧情報という情報価値の異なる二つの入れ物に乗せ、それを順序よく並べて聞き手に差し出すわけである。ここで気を付けなければならないことは、二つの入れ物を順序よく並べる、というのはどのようにして行うのかということである。結論から先に言うと、それは[旧情報]から[新情報]へという流れに沿って配列する、ということに尽きる。すなわち、話し手は、情報量の少ない、旧情報を担う要素を文頭に置き、文末には情報量の大きい、新情報を担う要素が来るように情報構造を整えるのである。具体例を見てみよう。

(5A) : What did the twins tell their mother?

B : a. The twins told their mother all their secrets.²

b. * The twins told all the secrets to their mother.

上の例文では、Aの質問に対してBは(5a)のように答えることはできるが、(5b)のように言うことはできない。それは、この文の情報構造が旧情報から新情報という配列になっていないからである。すなわち、(5b)ではAにとって新情報である all the secrets が旧情報である their

mother よりも前に置かれているからである。(5b)の情報構造を表せば、次のようになる。

The twins told all the secrets to their mother.

旧情報 新情報 旧情報

これを見れば明らかなように、[旧情報] から [新情報] へという情報構造の流れが途中で逆転し、[新情報] から [旧情報] という語順になっていることが分かる。もう一つ分かりやすい例を見てみよう。

(6)A : What did John do in the park?

B : a. John found a homeless dog.

b. * A homeless dog was found by John.

(6b)は英語の受動文を習ったばかりの中学生にしばしば見られる誤りである。やっかいなことに、この受動文は文法的には正しい文であるが、この文脈では不自然な文と判断され、実際の談話の中で用いられることは決してないのである。なぜなら、能動文を用いた(6a)のような答え方があるにもかかわらず、(6b)では受動文を用い、わざわざ [新情報] から [旧情報] へという語順に変えて答えているからである。すなわち、a homeless dog は不定冠詞が付いていることから分かるように、Bの発話で初めて談話に登場し、したがってAにとっては新情報である。ところが受動文を用いたため、この不定名詞句は文頭の位置を占め、同時にAにとって旧情報である John が文末の位置に置かれ、結果として [新情報] から [旧情報] という情報の流れになってしまっているのである。(6b)が不自然な文となっているはこのためである。

これらのことから、話し手は次のような情報構造の原則に従うことが求められる。

(7) 情報構造の原則

文中の語順は、旧情報を表す要素から、新情報を表す要素へと配列することを原則とする。

(cf. Inoue 1982 : 261)

この原則は、文頭には聞き手がすでに知っている情報、つまり最も情報量の少ない要素（旧情報）を置き、文末には未知の情報、すなわち最も情報量の多い要素（新情報）が来るように語順を整える、ということ述べたものである。このことは、私たちがものを言う場合、いきなり相手の全く知らないこと（新情報）から文を始めるのではなく、ある程度、お互いが知っている事柄（旧情報）を主語にたてて話を始め、それについて何か新しいことをつけ加える、という暗黙の約束がある、と言い換えてもよい。

3. 新情報・旧情報とその決め方

これまで、文は話し手、聞き手を含む発話の場面を考慮することによってその情報構造が明らかになり、文中の語順は [旧情報から新情報へ] という情報構造の原則に従う、ということを書いてきた。ここで、新情報とか旧情報というのは誰にとってのものなのか、また誰によってその判定が下されるのか、ということについて予めもう少し明確にしておく必要がある。

発話の場面には、通例、話し手と聞き手がいるわけだが、話し手にとってみれば伝える話の内容は自分が既に知っていること、すなわち、旧情報である。したがって、新情報・旧情報というのは、すべて聞き手にとってのものである、ということになる。次に、誰によってその判定がなされるかということ、それは話し手によって下されるのである。話し手は、聞き手との関

係や発話の場面・状況から、聞き手がすでに知っていることとまだ知らないことの見込みをつけながら、新情報・旧情報の判断を下している、ということが出来る。これらのことをふまえて、新情報・旧情報についてももう少し厳密に規定すると次のようになる：

(8) 新情報：聞き手にとって、未知であり、場面や文脈から予測することができない、と話し手が判断している情報。

旧情報：聞き手にとって、よく知られているか、場面や文脈から予測できる、と話し手が判断している情報。³ (cf. Halliday 1985 : 277)

さて、話し手の側で決めた発話の新情報と旧情報の区別を、聞き手の側は何を頼りに判断したらよいのだろうか。最もわかりやすいのは、文強勢 (sentence stress) が置かれている要素が新情報を表す、すなわち文の最も強く発音される部分が新情報を担っている、という場合である。これは、相手にとって重要である (=情報量が多い=新情報) と思うことは強く言うはずであるからである。たとえば、次の例で見てみよう。

(9) a. John broke the **window**.

b. John **broke** the window.

c. **John** broke the window. (太文字はその語に文強勢が置かれていることを示す)

(9)のいずれの例も「ジョンはその窓を割った」という命題を述べているが、話し手が新情報として伝えたい部分は文強勢によって示され、それぞれ(a)「その窓」(b)「割ったという行為」(c)「ジョン」である。この違いが分かるように訳すと次のようになる。

(10) a. ジョンは何を割ったかという、その窓です。

b. ジョンは窓をどうしたかという、割ってしまいました。

c. だれがその窓を割ったかという、ジョンです。

このように、実際の発話では、話し手は新情報を担っている要素を他の要素より強く発音することから、聞き手は何が新情報であるか容易に確認することができる。(話し手の側に立てば、新情報として提示したい要素は最も強く発音することによって示すことができる。)

やっかいなのは、音声ではなく文字で印刷されているような場合である。この場合、新情報がどこにあるのか、聞き手にはすぐ分かるようにはなっていない。話し手は新情報の位置を太文字で示すようなことはしないからである。したがって、原則的には、聞き手は場面や文脈を頼りに文のどの部分が新情報を担っているのか、ということ判断しながら、話し手の意図を探っていくことになる。たとえば、次の例で考えてみよう。

(11) a. Who mended the roof yesterday?

b. What did John do to the roof yesterday?

c. When did John mend the roof?

(12) John mended the roof yesterday.

(12)の文は(11 a)-(11 c)のいずれの文の応答としても適当であるが、それぞれの文脈に応じて新情報を担う要素が変化する。(11 a)への応答では John が新情報を担い、(11 b)の文脈では mended という行為が新情報となり、(11 c)の文脈では yesterday が新情報を担っている。

ここで注意しておかねばならないことがある。それは(11 a)への応答では John が新情報を担い、(12)は [新情報] - [旧情報] という語順となるので、一見すると情報構造の原則に違反しているように思われる。しかし、実際の発話では、同じ語句の繰り返しを避けるために、*It's John.* とか、*John did.*、あるいは親しい友人同士などでは *John.* というように、代用形や省略

形を用いて答えるのが普通である。It's John. では [旧情報 (=It's)] - [新情報 (=John)] という語順になっており、情報構造の原則に従っている。また、John did. の文では、一見すると [新情報 (=John)] から [旧情報 (=did)] という語順になっているが、この did は旧情報を伝えているというよりむしろ、[主語] - [述語] という文の構造を整えるために必要な要素と考えるべきである。このことは、did を省略して John. と言うことができることからわかる。この場合、John. という発話は新情報だけからなる文である。このように、発話には必ず新情報が含まれていなければならないが、旧情報は必ずしも含まれている必要はなく、場合によっては省略することもできる、ということも留意しておくべきである。

もう一つ注意しておきたいのは、聞き手が頼りにしているのは場面や文脈だけではなく、統語的・意味的な情報も同時に考慮に入れているということである。聞き手は、情報構造の原則を補足する意味で、どのような要素が新情報を担うのに容易であるか、いわば [新情報になりやすい] 度合いを考慮に入れられているのである。一般的な傾向として、聞き手にとって未知である要素ほど新情報になりやすく、したがって文末に置かれる可能性が高い、ということができる。このことを次の例で考えてみることにしよう。

(13) a. John gave a book to Mary.

b. @John gave Mary a book.

(14) a. John gave a book to the girl.

b. @John gave the girl a book.

(15) a. John gave a book to her.

b. @John gave her a book.

(16) a. John gave the book to Mary.

b. @John gave Mary the book.

(17) a. John gave the book to her.

b. @John gave her the book.

(Erteschik-Shir, 1979 : 450)

(13)-(17) の各文のうち、@印をつけた(b)文がより自然な文である。文末に固有名詞が置かれている (13 a) より不定名詞句が置かれている (13 b) のほうが自然な文であることから、不定名詞句のほうが固有名詞より新情報になりやすいことがわかる。また、(14 a) より (14 b) のほうが自然な文であることから、不定名詞句のほうが定名詞句より新情報になりやすいことがわかる。同様に、(15 a) と (15 b) を比較すると、不定名詞句のほうが代名詞より新情報になりやすく、(16 a) と (16 b) を比較すると、定名詞句のほうが固有名詞より新情報になりやすく、(17 a) と (17 b) を比較すると、定名詞句のほうが代名詞より新情報になりやすいことがわかる。これらのことをまとめると、次のようになる。

(18) 新情報になりやすい順序

不定名詞句 > 定名詞句 > 固有名詞 > 代名詞

言うまでもないことであるが、(18) の順序を逆にすると、旧情報になりやすい順序になる。

4. 談話における受動文の機能

私たちは、発話の際、自分の述べる事が相手によく伝わるようにするために、情報量の少

ないものから多いもの、すなわち旧情報から新情報へという順に文の要素を並べるのが原則であることを見てきた。ところが、文は情報構造だけで成り立っているわけではなく、主語、述語、目的語、補語などといった統語構造を持つ。したがって、情報構造の原則に沿う語順と統語的に決まる語順が一致すれば問題はないが、一致しない場合には、これを調整するために何らかの工夫をする必要がある。その方法は、音声的には対照的な文強勢を用いることであり、もう一つは文法規則が許す範囲で文の要素を動かし、できる限り情報構造の原則に沿った語順、すなわち旧情報から新情報へという語順に近づける、という方法である。

英語は、日本語に比べると語順の固定した言語であると言われているが、情報構造の原則に合わせるために必要にして十分な構文が用意されている。これまで、それぞれ別個に学んできた二重目的語構文、受動文、there 構文等の構文は、「情報構造の原則に合わせるための構文」であるという見方もできる。このような観点から、本稿では紙幅の都合により受動文を取り上げ、談話における受動文の特徴的な機能を明らかにしたい。

4.1 受動文は意図的な構文である

英語を学習する過程で、必ず行うのが能動文と受動文の書き換え練習である。

(18) a. The child ate the sandwich.

b. The sandwich was eaten by the child.

この書き換え練習の過程で陥りやすい錯覚の一つに、学習者は、能動文＝受動文である、という図式を作り上げ、この二つの構文はいつでも、どこでも、伝える意味を変えずに置き換え可能である、という誤った理解の仕方が定着してしまう、ということがあげられる。

人間の用いる自然言語は、人間中心的にできており、発話の中で動作主として人間が登場していれば、その人を主語に選んでその行為・事柄を述べるのが自然な形である。⁴ すなわち、ものを述べる場合、動作主を主語にした能動文を用いる、というのが一般的な基準となっている。これに対して、受動文では、構文上、動作を受けるもの(対象)をわざわざ主語にたて、動作を行うもの(動作主)を文末に回すか、あるいは明示しないでおく、というかなり複雑な操作を必要とする。このように能動文と比べると、受動文は極めて意図的な構文である、ということができる。したがって、受動文を用いるには、わざわざ用いるに足るだけのしかるべき理由がなくてはならないのである。学校文法ではこの点の理解が十分ではない。

4.2 受動文が好まれる三つの場合

受動文がどういう場合に好まれるか、すなわち、上述の「しかるべき理由」に関しては多くの研究があるが、最も一般性のある形でまとめるとなれば、次のように言うことができる。受動文というのは、まず、その文のテーマづけを担う主語の位置を、動作主以外のものに明け渡し、動作主のほうは、文の表面に出ないでもらうか、もし、表にでるのなら、通例、文末の、英語における情報構造から言えば新情報を担う最も重要な位置に現れてもらうための仕組みである、ということができる。⁵

この一般化は、受動文が好まれる三つの場合を一言で表したものである。まず、「その文のテーマづけを担う主語の位置を、動作主以外のものに明け渡す」ということは、普通は主語にはならない要素である「動作を受ける対象」、すなわち、典型的には動作の目的語を主語にたて、これを主題(theme)として文を始めたい、ということ述べている。次に、「動作主のほうは、

文の表面に出ないでもらう」というのは、普通は主語として文の表面に現れている動作主を、後述するような理由で文の表に出さないでおく、ということを書いている。最後に、「もし、表にでるのなら、通例、文末の、英語における情報構造から言えば新情報を担う最も重要な位置に現れてもらう」ということは、通例は、文頭の旧情報が占める位置（＝主語の位置）に現れる動作主を文末に移動し、聞き手に新情報として提示する、ということを書いているのである。受動文が好まれる三つの場合を整理すると次のようになる。

1. 動作、行為の対象となるものを主題にして文を始める場合。
2. 動作主を明らかにすることを避けたい場合。
3. 動作主を新情報として聞き手に提示したい場合。

以下、1－3のそれぞれの場合について、具体的な例を挙げて見ていくことにする。

4.2.1 動作の対象となるものを主題にして文を始める場合

- (19) a. The escaped leopard was caught again two hours later.
b. They caught the escaped leopard again two hours later.

(20) Mother Teresa's health improving; off respirator

CALCUTTA, India (AP) Mother Teresa began breathing without the aid of a respirator Tuesday... *The Nobel Prize laureate was hooked up to the respirator last week, but developed a lung infection from its prolonged use.*

(*The Daily Yomiuri*, Aug. 28, 1996)

- (21) Tijuana seems built on old tires. There are an estimated five million scrap tires in the state of Baja California, which has a population of about two million. *Tires or pieces of tires are used to shore up hillsides and as steps and flowerpots.* You would not think that Baja needs any more. But Vigil did, and now, at 45, he's on the way to riches.
(*National Geographic*, August 1996)

(19 a) の受動文は、逃げ出したヒョウはその後どうなったかという視点、すなわちヒョウを主題にして出来事を述べている文である。このことは、捕獲する人間の側から述べている(19 b) の能動文と比べてみると、よりいっそう明らかになる。(20) は、マザー・テレサの病状を伝える AP 電の記事である。この記事のタイトルからも分かるように、話題の中心は病床にあるマザー・テレサである。ここでの話題の中心は、彼女になにが起きているか、ということであって、医師がこの患者に人工呼吸器をつないだということではない。このあたりのニュアンスは(20) の受動文によく現れている。(21) の例は、メキシコの国境の町ティファナ (Tijuana) について述べている雑誌記事からの抜粋である。冒頭の文では「ティファナは古いタイヤの上に建てられているようだ。」と説明され、これを受けて「500万ものスクラップタイヤがある」とタイヤについて語られている。このような談話の流れから、次の文でも、タイヤを主題にして、そのタイヤがどうしたのか、と続けるのが自然である。(4.3参照)

4.2.2 動作主を明らかにすることを避けたい場合

これにはどのような場合が考えられるかというと、典型的には、(i)内容を客観的に表現したい場合、(ii)内容が不快・不都合であるような場合、(iii)責任の所在を明確にしたい場合、(iv)動作主が明らかでないような場合、等を挙げることができる。

(i)内容を客観的に表現したい場合：

これについて Huddleston (1971) は、受動文の現れる頻度が最も高いのは学術論文であり、

最も低いのは会話文である、と述べている。科学論文などでは、実験や観察によって得られたデータやそこから導かれた考察、結論などは、できるだけ客観的に述べたい。また、実験や観察を行った当事者が“I”，あるいは“We”などのような主語の形で文の表に現れるのは、主観的な印象を与えるおそれがあるのでできれば避けたい。受動文はこのような要請にぴったりとあてはまる構文なのである。すなわち、実験や観察を行った当事者（動作主）が文の表に出ない分だけ、その内容（対象）は客観的であるという印象を与えることができるのである。また、会話というのは、話し手・聞き手の双方が発話の場面に現れて直接的にやりとりするわけであるから、通例、話し手（動作主）は文頭に現れ、その内容は主観的傾向の強いものになる。このことから、会話文では受動文の現れる頻度が低いことが予測される。

- (22) Subjects who reported using alcohol at least once in the past 12 months *were classified* as an alcohol user and subjects who did not use alcohol in the past 12 months were classified as an alcohol nonuser.

(*Journal of Sport Behavior*, vol.18, No.3, 1995)

- (23) The same materials *were used* as in Experiment 1. Both layouts *were presented* to each subject; their order of presentation *was balanced* over subjects.

(*Journal of Experimental Child Psychology*, vol.61, No.3, 1996)

(22), (23) の例は、実験の手順を述べたものであるが、実験を行った当事者（動作主）は文の表に現れていない。このため、読み手に対して事実が客観的に淡々と述べられている、という印象を与えたのである。また、記述の客観性が求められる新聞記事などの報道文も、受動文が用いられる頻度が高い。

- (24) **Silence Is Deadlier**---by Bruce Hoffman

It has been more than a month since TWA Flight 800 exploded and crashed into the sea off Long Island. Despite the tons of aircraft parts, pieces of luggage and other personal effects dredged from the murky water, *no evidence has been discovered* that conclusively pinpoints the cause of the tragedy.

(*The Los Angeles Times*, Aug.18, 1996)

(24) の例では、動作主である捜査当局を文の表に出さないことによって、取材に当たった記者が事実をありのままに報道している姿勢を読みとることができる。

これまで見てきたことから、自分が述べたいことを客観的に表現する方法の一つとして、受動文という構文が用意されているといえることができる。

(ii) 内容が不快・不都合であるような場合：

述べる内容が聞き手や当事者、あるいは第三者に対して不快・不都合であるような場合、とりわけ話し手自身がその原因であるような場合には、受動文を用いることによってその行為や動作を行う当事者（動作主）を伏せておくことができる。例えば、人員整理を発表するような場合、その内容は聞き手にとって不都合なものであり、経営者はできれば文の表に出たくない、そのような場合には、次の(25 b)より(25 a)の文を用いるであろう。

- (25) a. There will be some redundancies as a result of the fact that *new computer program will be introduced*.

- b. There will be some redundancies as a result of the fact that we will introduce new computer program. (Declerck 1991 : 211)

- (26) a. Two weeks ago a *colleague was held up* at gunpoint when she stopped to fill up at a petrol station.

(*The Independent*, compiled from *The Daily Yomiuri*, Sep.1, 1996)

- b. Mexico's Radio Red said *one soldier was killed and two others were wounded* on Friday after a group of heavily armed men attacked a military convoy in the western state of Michoacan. (Reuter - *The Daily Yomiuri*, Sep.1, 1996)

- (27) It would be mortifying to find myself ten francs short and *be obliged to borrow* from my guest. I could not bring myself to do that. I knew exactly how much I had and if the bill came to more I made up my mind that I would put my pocket and with a dramatic cry start up and say *it had been picked*. Of course it would be awkward if she had not money enough either to pay the bill.

(*The Luncheon*, W. Somerset Maugham)

(26 a, b) の例のように「襲われる」「殺される」など当事者にとって不都合な内容は受動文で表されることが多い。このような場合、だれがその行為を行ったかということより、むしろだれがその行為による被害を被ったか、という視点で語られるからである。(27)で用いられている *oblige* は「義務づける」「余儀なく～をさせる」「せざるを得ない」などの意味を持つ動詞で、その語源である「縛りつける」という語義からも分かるように、外からの強制力を含意している。この「外からの強制力」はどのみち愉快なことではなく、このため不便・不都合を被るような場合には、この動詞を受動文で用いてある種の不快感を表現することができる。(27)は、ある女性をなけなしの金で高級レストランに招待する羽目になった男(サマット・モーム自身)が支払いの場を思い浮かべながら語ったところで、*oblige* を受動文で用いて「したくないのにせざるを得ない」という不快感を読みとることができる。また、*it had been picked* という事柄も不都合なことであり、(26 a, b)と同様、これを受動文で表現している。

(iii) 責任の所在を明確にしたい場合：

ある事柄を客観的に述べたい場合は、日本語では「～と思われる」、あるいは「～と考えられる」などのように動詞に自発の助動詞「れる・られる」を用いて表すことがある。このような場合、英語では **It is assumed that...**, **It is believed that...**, などの受動文を用いて表現するとぴったりすることがある。

- (28) a. *It is assumed that* he will announce his candidacy soon.

b. *It is believed that* John has accepted the proposal.

(28 a, b) の例文は、あたかも第三者によって述べられているような印象を聞き手に与える。しかし、文の表には現れていないが、*assume* や *believe* という行為を行う当事者(動作主)は話し手自身である。このように、受動文を用いて動作主(話し手)を文の背後に隠すことによって、もし、*that* 節の内容が事実と異なっている場合でも、その責任を回避したり、軽減することができるような仕組みが用意されているのである。

- (29) The document also included a false statement concerning the content of the unheated product, sources revealed. It said the unheated product was safe because *it was made* from domestically collected blood, when in fact *it was made* with plasma imported from the United States. (*The Daily Yomiuri*, Aug.25, 1996)

(29) では、the document を書いた当事者は、受動文を用いることによって、非加熱製剤を製

造した責任がだれにあるか、ということを書けずすます言い方をしている。

これまで見てきたように、ある動作や行為を行った当事者（動作主）は、場合によってはその責任を明らかにしたくないことがある。このような場合に、受動文は動作主に言及しないでおくことによってその責任を巧みに回避する、という機能を発揮することができるのである。

(iv) 動作主が明らかでない場合：

ある動作や行為を行えば、誰がそれを行ったかははっきりしているのが普通であるが、場合によっては、その動作主が明らかでないことがある。

- (30) *Numerous theories have been advanced, ranging from catastrophic mechanical failure to a terrorist bomb or shoulder-fired, heat-seeking missile.*

(*The Los Angeles Times*, Aug. 18, 1996)

(30) の例文は、TWA800便墜落に関する新聞記事（例文 (24)）の後続部分である。墜落の原因をめぐる様々な意見が提案されているが、だれがどのような意見を述べたかということは明らかではない。したがって、この内容を能動文で表そうとすると、その主語が不定のものになったり、不明確になってしまう。このように動作主が明らかでない場合、受動文が好まれる傾向がある。

- (31) *The dictatorship was crowned in blood in the revolution of 1910, in which more than a million people died.* (*National Geographic*, August, 1996)

(31) の例文では、*drown*（溺れさせる）という語が比喩的に用いられているため、特定の動作主を挙げることはできない。また、*people drowned the dictatorship...* というように能動文で表すと、*drown* という語の比喩的な意味が生きてこない。動作主を特定せず、かつこの語の持つ比喩的な意味を生かすとすると、受動文を用いるのが最も自然な選択なのである。

4.2.3 動作主を新情報として聞き手に提示したい場合

4.1でもふれたが、言語は人間中心的にできており、発話の中で動作主として人間が登場していれば、その人を主語に選んでその行為・事柄を述べるのが自然の形である。すなわち、文法構造から見れば、ものを述べる場合、動作主を主語にした能動文を用いる、というのが一般的な基準となっている。また、情報構造に関していえば、英文では、聞き手にとってすでにわかっていること（旧情報）で文を始め、文末のほうに聞き手にとって新しいこと（新情報）を置くのが普通である。これら二つの構造を重ね合わせてみると、主語＝動作主＝旧情報という図式が得られる。これは、動作・行為の主体である動作主は、ほうっておけば主語の位置を占め、旧情報を担うということである。しかし、動作主は、場合によっては、聞き手に対して重要な情報価値を持ち、新情報として提示したいことがある。受動文という構文は、このような場合の選択肢の一つなのである。この構文を用いると、動作主は **by**＋動作主という形で、文末という新情報が置かれる重要な位置に表すことができる。

- (32) *Many kinds of food were introduced from abroad. For example, pumpkins were brought by the Portuguese from Cambodia. The Japanese named them Kabocha after the country.*

Potatoes were introduced by the Dutch from Jakarta. The Japanese called them jagatara-imo after the city. Later they called them jagaimo for short.

(*Sunshine English Course 3* : 18)

- (33) *The war, which began when Russia sent troops into Chechnya to crush a 3 year old*

separatist regime there, has not just destroyed the fabric of the capital and killed thousands of soldiers and separatist fighters. *The heaviest penalty has been paid by the silent majority of peaceful civilians...* who want nothing more than a quiet life and the chance to bring up their children decently, and to whom the passions of war mean little. (The Los Angeles Times, Aug. 25, 1996)

(32)の第二文では、外国から伝えられた食物のうち、聞き手を含めて誰でも知っているかぼちゃ(旧情報)を主題として取り上げ、「この食物がどのようにもたらされたのかご存じないかもしれませんが、それはポルトガル人がカンボジアから伝えたものです。」という新しい情報をつけ加えている文なのである。すなわち、聞き手はかぼちゃのことは知っているがその由来は知らないだろうと話し手は判断し、かぼちゃを伝えた動作主であるポルトガル人を、情報構造の上で重要な文末の位置に *by*+動作主の形で明示したのである。第四文も同様である。

(33)の斜字体の部分は、戦争で最も大きな犠牲を払った人(旧情報)は、兵士でも分離派闘志でもなく、誰かというそれは物言わぬ一般市民(新情報)なのである、ということ述べたものである。ここでも、犠牲を払った一般市民(動作主)を新情報として文末の重要な位置に *by*+動作主の形で置き、聞き手・読者の注意を喚起しているのである。

4.3 受動文のもう一つの機能・・・先行文脈とのつながり

前節では、受動文が好まれる三つの場合を考えてきたが、受動文にはこのほかにもう一つ重要な役割がある。それは、先行文脈とのつながりをなめらかにする、というものである。これは受動文そのものに備わった機能というより、談話における「話題(topic)の一貫性」という原則から導かれたものである。分かりやすい例でこれを見てみよう。

(34) a. The Prime Minister stepped off the plane. *She was immediately surrounded by journalists.*

b. The Prime Minister stepped off the plane. *Journalists immediately surrounded her.*

(Brown & Yule 1983 : 130)

Brown & Yule (1983 : 130)によると、(34 a) と (34 b) の談話を比較すると、(34 a) のほうが談話のつながりがよいという。その理由は、聞き手は先行文脈の話題が後続する文脈でも維持されるほうが、そうでない場合より理解しやすい、という「話題の一貫性」の原則による、と述べている。(34 a) では、第一文で the Prime Minister が話題になっているが、つながりのよい談話とするには、後続の第二文でもこれを話題として維持したい。しかし、「首相を取り囲む」という行為の動作主は *journalists* であり、ほうっておけばこれが続く第二文の主語となってしまう。しかし、これでは話題が the Prime Minister から *journalists* に変わってしまい、「話題の一貫性」の原則が崩れてしまう。the Prime Minister を話題として主語の位置に据えたままこの状況を述べるには、受動文を用いるしか方法は残されていないのである。これに対して、(34 b) では、第二文で話題は *journalists* に代わり、「話題の一貫性」の原則を破っているため、先行文脈とのつながりがぎこちなくなっている。このように、文脈に応じて受動文を適切に用いることによって、話題の一貫性の原則を維持し、結果として先行文脈とのつながりをなめらかにすることができるのである。

この原則は、話題のレベルだけでなく、文のレベルにも当てはまる。

(35) a. The Pope arrived in Madrid this morning and *was immediately besieged by*

reporters.

b. The Pope arrived in Madrid this morning and reporters immediately besieged him. (Declerck 1991 : 213)

(36) "Mother Trresa is significantly better from the crisis she faced after *she was hospitalized* last Tuesday," said Dr. S. K. Sen, medical director of the Woodlands Nursing Home. (AP-*The Daily Yomiuri*, Aug.28, 1996)

(35 a) と (35 b) は、同じ内容を伝える文であるが、(35 a) のほうがより自然な文である。(35 a) では、and で結ばれた二つの文の主題が同じになるように、第 2 文で受動文が用いられている。一方、(35 b) では、第一文の主題である the Pope が、第 2 文では reporters に変えられている。このため、(35 b) は主題の一貫性がなく、文のつながりがぎこちなくなり、結果として不自然な文となってしまうのである。(36) は、Mother Teresa を主題として文を始め、この主題を接続詞 after に導かれた節でも維持するために受動文が用いられている例である。

話題の一貫性の原則と受動文の関係は、次の例を比較してみるとさらによく理解できる。

(37) a. **Ailing Agassi Blasted Out Of Sydney**

SYDNEY (AP) *Andre Agassi, the Wimbledon champion and third seed, was dispatched by Patrik Kuhnen, a free-swinging German ranked 106th in the world.* (AP-*The Daily Yomiuri*, Oct.10, 1992)

b. **Ailing Agassi Blasted Out Of Sydney**

SYDNEY (AP) Patrik Kuhnen, a free-swinging German ranked 106th in the world, dispatched Andre Agassi, the Wimbledon chgmpion and third seed, from the Sydney Indoor tennis tournament Thursday.

(37 a) は、全豪オープンテニストーナメントの結果を伝える記事である。(37 b) は、(37 a) の受動文を能動文に書き換えたものである。どちらがニュース記事として読みやすく、わかりやすいかという点、受動文を用いた (37 a) のほうである。この差は話題を滑らかにつなげるということ、得られた情報を情報構造上、適切な順序で文中に配置する、という二つの要請を満たしているか否かということに由来する。これは、言い換えれば、ニュース記事として内容を分かりやすく伝えるためには、既述の二つの原則を考慮する必要がある、ということである。すなわち、談話の話題を維持する「話題の一貫性」の原則と、情報は [旧情報から新情報へ] 並べるといふ「情報構造の原則」の二つの原則を同時に満たすことが求められるのである。

(37 a) では、アガシが小見出しに登場し、この記事の話題となっている。これは、テニスに少しでも関心のある人ならば、アガシといえば、あのアメリカのスタープレーヤーだとすぐにわかり、読者の目を引くことができる、とこの記事の記者は判断しているからである。このことから、この記者は「アガシ」は読者にとってすでに知っている人、すなわち、旧情報として扱っているということがわかる。また、トッププレーヤーであるアガシを破ったのは世界ランキング106位で、いわば無名のプレーヤーであるパトリック・クーンンという選手であり、これは読者にとっては未知の新情報である。さらに、試合結果に関しては、クーンンがアガシを破ったという事実関係がある。

ここまでを整理すると、次のようになる。先行文脈である小見出しでアガシが話題として登場した。話題の一貫性の原則から、後続の文でもアガシを話題として文頭の主語に据えて文を始めたい。また、アガシは旧情報であるので、情報構造の原則から、これもやはり文頭の主語

の位置に置きたい。同時に、無名の選手クーネンは新情報であるので、これは文末の位置に来るようにしたい。これらの条件をすべて満足した上で試合結果の事実関係を述べるには、アガシを主語にした受動文を用いて表すしか方法がないのである。(37a)の記事は、このように話題の一貫性の原則と情報構造の原則から、しかるべくして受動文が用いられた例なのである。

これに対して、(37b)では、話題性の低いクーネンが文頭に現れ、かつ新情報を担って文頭の主語の位置を占めている。その一方で、旧情報であるアガシが文末に置かれている。そのため、話題の一貫性の原則と情報構造の原則の二つの原則を破ることになり、結果としてつながりの悪い、ごちない記事になってしまっているのである。

4.4 by+動作主の有無

学校の英語学習において受動文を初めて習うのは、使用する教科書にもよるが、概ね中学2年生になってからである。導入する際には、必ず能動文と対比させ、能動文の目的語を主語の位置に動かし、主語に前置詞 *by* を付けて文末に移動し、同時に動詞を *be* 動詞+過去分詞形に変えると受動文が得られる、と指導する。ここで問題となるのが、能動文から受動文への徹底した書き換え練習で、ほとんど例外なく *by*+動作主を書き表すよう求めている。このことが、後になって、実際に英語を話したり、文書を書いたりする場合に大きな障害となるのである。

日本の英語教育における *by*+動作主の徹底指導とは裏腹に、英語で用いられる受動文の80-90%は *by*+動作主なしで使われている、というのが現実なのである。(Quirk et al. 1985: 164, Celce-Murcia and Larsen-Freeman 1983:225) これは、文脈から動作主を推論できる場合が大多数であるということに加え、4.2.2で述べたように動作主を明示したくないという理由によるものである。したがって、受動文を使用する際には *by*+動作主を表さずに用いるのが一般的である、ということをおかしく銘記しておかなければならない。そのうえで、残りの10-20%の受動文が *by*+動作主を伴っている理由、すなわち話し手は動作主を新情報として聞き手に伝えた場合に *by*+動作主を明示する、という情報構造上の機能を再確認しておく必要がある。このことを理解しておけば、次のようなおかしい英文を話したり、書いたりすることはなくなるはずである。

- (38) a. Then I hit John on the head.
 b. * Then John *was hit* on the head *by me*.
 (39) a. The electric car run over a man.
 b. * A man *was run over by the electric car*.

(38b)は、能動文(38a)から受動文に書き換えたものであるが、不適格な文である。不自然なのは *by me* の部分である。 *me* という代名詞は話し手自身を指すが、話し手・聞き手は、発話の場面に登場し、お互いに相手のことを承知しているのであるから、定義上、旧情報である。そもそも、受動文の *by*+動作主は、聞き手に新情報を伝えるという理由で文末という重要な位置に置かれるのである。この位置を旧情報である話し手 (*me*) が占めているので、(38b)は不自然な文となるのである。また、(38b)の命題内容は(38a)という能動文で十分表すことができるものであり、わざわざ受動文にする理由は、ここでは見あたらない。

(39a)を受動文にした(39b)も不自然な文である。これは、新情報を担う不定名詞句 (*a man*) を、通例は旧情報が占める主語の位置に置き、文末の新情報が占めるべき位置に旧情報を担う定名詞句表現 (*the electric car*) を置いて、[旧情報から新情報へ]という情報構造の原

則を意図的に破っているからである。わざわざ受動文を用いなくとも、(39b)の命題内容は(39a)の能動文で十分表すことができるのである。⁶

受動文では by+動作主を表さない、という一般的傾向を次の新聞記事で確かめてみよう。

(40) **Chun gets death for mutiny, treason South Korean court sentences Roh to 22_{1/2} Years in 'trial of centry'**

SEOUL (AP) In a verdict condemning South Korea's bloody, militaristic past, *former President Chun Doo Hwan was found guilty* Monday of mutiny and treason and sentenced to death. (AP-*The Daily Yomiuri*, Aug.27, 1996)

(40)の記事では、冒頭に former President Chun Doo Hwan を主語にした受動文が効果的に用いられている。まず、見出しにチョン・ド・ハン元大統領の名前が挙げられていることから、この記事の話題の中心はチョン・ド・ハン元大統領であることがわかる。また、読者は元大統領のことを知っていると言者は判断しているので、チョン・ド・ハン元大統領は旧情報を担っていると考えられる。ここで、ニュース記事として内容を分かりやすく伝えるためには、二つの原則を考慮する必要がある。すなわち、談話の話題を維持する「話題の一貫性」の原則と情報は[旧情報から新情報へ]並べるという「情報構造の原則」の二つの原則を満たすことが求められる。その結果、ここで選択された構文が受動文なのである。ニュースの話題であり、同時に旧情報であるチョン・ド・ハン元大統領を主語にして文を始め、「その元大統領がどうなったか」という重要な情報は文末の新情報の位置で述べる。また、判決を下した動作主(裁判官)は文脈から分かるので、わざわざ by+動作主で明らかにする必要はない。このような文脈上の要請をすべて満たしたうえで具現化したのが、冒頭の受動文なのである。

*本研究は、文部省科学研究費補助金基盤研究(C)、課題番号 No.07610462の援助を受けてなされた研究の一部である。また、本研究は上越教育大学情報処理センターJUEN SYSTEMの支援を受けている。

注

1. 池上(1991:66-67)では、第三文型と第四文型の違いを意味論の立場から論じている。
2. 実際の談話では、同じ語句の繰り返しを避けるために代名詞を用いて次のように答えるのが普通である。これは、話し手と聞き手にとって共通の、言わなくても分かっている部分は省略されるか、あるいは代用形を用いるのが自然であるからである。

(5) Speaker A : What did the twins tell their mother?

Speaker B : They told her all the secrets.

以下、論点を分かりやすく示すために代名詞を用いずに表記することがある。

3. 新情報・旧情報の定義に関しては、代表的なものに本稿で採用した Halliday (1985), Kuno (1987)らの recoverability によるもの、Chafe(1976)の consciousness によるもの、Clark and Haviland (1977)らの shared knowledge によるものがある。また、Prince (1981)は新情報・旧情報という二分類をとらず、Assumed Familiarity という新たなスケールのもとに New, Inferable, Evoked の三項目をたてて情報構造を分析している。

4. 安井 (1978:57) を参照。
5. 安井稔 (1978:163) を参照。
6. (38 b), (39 b), (40 b) が不自然な文であることは, Kuno (1987) の「視点 (empathy)」の立場からも説明できる。詳細は Kuno (1987:203-270) を参照。

参 考 文 献

- 池上嘉彦. 1991. 『英文法を考える』東京: 筑摩書房.
- Brown, G. and G. Yule. 1983. *Discourse Analysis*. London: Cambridge Univ. Press.
- Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman. 1983. *The Grammar Book: An ESL/EFL Teacher's Course*. Boston: Heinle & Heinle Publishers.
- Chafe, W. 1976. "Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view," in Li, C. ed., *Subject and Topic*. New York: Academic press.
- Clark, H. and S. Haviland. 1977. "Comprehension and the given-new contract," in R. Freedle, ed., *Discourse Production and Comprehension*. Norwood, N. J.: Ablex.
- Declerck, R. 1991. *Acomprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- 福地肇. 1985. 『談話の構造』東京: 大修館書店.
- Halliday, H. M. K. 1985. *Introduction to Functional Grammar*. London: Arnold.
- Huddleston, R. D. 1971. *The Sentence in Written English*. London: Cambridge Univ. Press.
- Inoue, K. 1982. "An interface of syntax, semantics, and discourse structures," *Lingua* 57: 259-300.
- Kuno, S. 1987. *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. Chicago, The University of Chicago Press.
- Prince, E. 1981. "Toward a taxonomy of given-new information," in Cole, P. ed. *Radical Pragmatics* pp. 223-255. New York: Academic Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 安井稔. 1978. 『新しい聞き手の文法』東京: 大修館書店.
- 安井稔. 1989. 『英文法を洗う』東京: 研究社出版.
- 安井稔. 1995. 『納得のゆく英文解釈』東京: 開拓社.

Information Structure and Functions of Passives in Discourse

Masahiro KATO*

ABSTRACT

The purpose of this study is to investigate the functional characteristics of passive constructions in discourse from the perspective of information structure. I have introduced the notions of old/new information and the principle of information structure developed in Halliday (1985), Inoue (1982), Kuno (1987), and Prince (1981). Then, I have pointed out that the English passive is a language internal device, which is intentionally used by the speaker/writer to adjust the flow of information in accordance with the principle of information structure. I have further demonstrated that the main functions of the passives are i) to put thematic elements in the subject position, ii) to avoid manifesting agents, iii) to present agents as new information, and iv) to contribute topic continuity in discourse.

* Division of Languages : Department of Foreign Languages